第6章　ネットワーク社会の中の親密と疎遠
――移動体メディア批判の社会的背景――

富　田　英　典

1　はじめに：通信メディアの発達とネットワーク社会

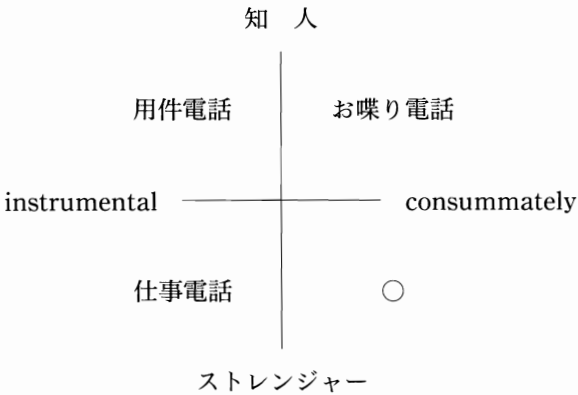
ネットワークは，社会の効率性を高め，ハイアラーキーな構造ではなく水平的な役割の連結によって成立する。ネットワーク社会とは，通信回線で接続された社会でもある。ネットワーク社会の到来とともに，通信回線はその重要性を高め，情報伝達技術の発達によりネットワークの構築が急速に進んでいる。そして，ネットワークの端末には，コンピュータ，ＦＡＸ，加入電話，移動体通信メディアなどが設置されている。

コンピュータは，近年のパーソナル化によりオフィスだけでなく各家庭にも設置され，プライベートな利用が盛んになりつつある。移動体通信に関しては，自動車電話，携帯電話，ＰＨＳ(以下，携帯電話とＰＨＳの両者をさす場合は移動電話と表記)，ポケットベル(ページャー)などが近年急速に普及している。携帯電話とＰＨＳの合計加入台数は，1998年11月末で4,400万台に達し，野村総合研究所「情報通信利用に関する実態調査」(1998年９月実施)によると，携帯電話・ＰＨＳを個人で利用している人は44.4％で，利用率は20代が最も高く男性の79.3％，女性の65.9％にのぼっている。現代人の人間関係のネットワークは，移動体メディアによって支えられていると言っても過言ではない。

本章は，このようなネットワーク社会における移動体メディアに注目し，そこで生まれる親密と疎遠，特に移動電話の普及が社会に与えた影響と混乱，移動電話批判の社会的背景について考察するものである。

2　ネットワーク社会の匿名性と親密性

ネットワーク社会の一翼を担う加入電話は，その利用形態に変化が生まれている。その変化は，「知人」と「ストレンジャー」の軸に「道具的(instrumental)利用」と「自足的(consummately)利用」の軸を交差させると理解しやすい。



電話の利用形態は，「instrumental」な利用から「consummately」な利用へと広がっている【吉見俊哉・若林幹夫・水越伸，1991】。「instrumental」な利用は，「知人」間でも「ストレンジャー」間でも成立する。ただ，「ストレンジャー」との「instrumental」な電話利用は，仕事上での利用が中心であり，そこには社会的な地位や役割が存在している。それに対して，「consummately」な利用は，「知人」間に限定されていた。しかし，伝言ダイヤル【岡田朋之，1991：1993】，テレクラ，ダイヤルQ²のパーティラインやツーショット【富田英典，1994】の登場により，「ストレンジャー」間にも「consummately」な利用が成立し始めたのである。また，その後，ポケットベルを利用した「ベル友」や，インターネットを利用した「メールフレンド」が加わっている。筆者は，このような関係を成立させる他者を「インティメイト・ストレンジャー」と呼んできた【富田英典，

1997：富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦，1997】。ただ，「ストレンジャー」間の「consummately」な関係は，犯罪や非行につながる危険性が盛んに指摘された。しかし，そのような批判をよそに，この新しい関係は確実に広がりつつある。そこで次に，その一例をインターネットを利用した新しい男女関係から取り上げてみたい。

3　「恋するネット」：インターネットが生み出す新しい男女関係

1990年代後半になり，パーソナル・コンピュータの普及と，民間プロバイダーの登場により，インターネットが広く一般家庭にも普及し始めている。1998年には，インターネットの電子メールが取り結ぶ新しい男女関係を描いたテレビドラマ「WITH　LOVE～近づくほどに，君が遠くなる～」(フジテレビ)が人気を集めた。

テレビドラマ「WITH LOVE～近づくほどに，君が遠くなる～」では，一通の間違いメールをきっかけに，「長谷川天(たかし)」(竹野内豊)と「村上雨音(あまね)」(田中美里)の「メル友」関係が始まる。お金が全ての世界，汚れた人間関係，現実の世界はきれい事だけではすまない。やり切れない気持ちになる二人だったが，メールで励ましあい支えあった。「パソコンの中に愛があるのか？」「疑似恋愛」「ダミーの恋人」と，周りは二人の関係を全く理解しない。しかし，どこの誰かということより，大事なことがあることに二人は気づいていた。世界中に張り巡らされた電子ネットワークが，二つの心をしっかりと結びつけていたのである。しかし，それはドラマの中だけの話ではない。

〈[98恋風景] バーチャルから現実へ：心満たしてくれた画面の彼〉

(前略)パソコン上の名前，ハンドルネームでの2人の会話が始まった。乱れた言葉づかいが多い電子メールの世界で，ナギの文章はいつも丁寧だった。すえ吉は好感を持った。一方，すえ吉はどんな話題でもまじめに考

えて律義に返事を出した。ナギは１人っきりの部屋に帰ることが楽しくなった。多彩な色を放つパソコンの画面が心の暖房になった。「おかえり，今日も一日ご苦労さん」。必ずすえ吉のメールが待っていてくれる。ナギの誕生日の２カ月後，「東京に行く用があるから，会わない？」というすえ吉のメールが届いた。午前９時に新宿の書店の前で待ち合わせた。喫茶店に入り２時間のデート。ナギは幼なじみに会ったような気がした。すえ吉はゲーム感覚で操作するパソコンのメールと，目の前の女性との会話が同じものとは思えず戸惑った。別れ際，ナギは自然に手を差し出し，握手をした。すえ吉の手は温かく，大きかった。すえ吉は毎月１回，上京するようになった。

「人付き合いが苦手だったのに，メールでは素の自分が出せた。会わなくてもすえ吉が私と同じ感性を持っていることがよくわかったんです」

なんでも話せるメール友達は，かけがえのない男性に変わった。

★

ナギがインターネットを始めて１年がたった昨年の晩秋，２人は婚約した。会った時間はわずかでも，心の深いところでつながることができたと思う。

すえ吉のメール。

【標題：きゃあ，結婚!?　ぐふふふふ】

結婚か……。その後に……君は，何したい。僕は，毎日……ね，一緒にいれたら，それで……いい？

結婚したら，２人は関西で暮らすつもりだ。　【小川節子】

（98.01.03 毎日新聞東京本紙朝刊）

電子メールやチャットは，恋愛関係が成立するためのきっかけにすぎないという議論もある。しかし，この事例からも分かるように単に会う約束のために利用されているのではなく，実際に会うまでにオンラインで二人の恋愛関係は

確実に成立している。電子メールのやりとりは，一見地味に見える。しかし，そこでは，お互いの価値観や性格を知り，本質的な部分で相手を好きになる恋愛関係が成立する可能性がある。インターネット上には，恋愛や出会いの場として開設されているホームページが多数登場している。恋のときめきと優しい愛情を育てる電子メールの世界は，情報化社会の「新しい恋愛関係」に私たちを誘っている。

最近の若者は直接的なコミュニケーションが苦手であり，自分自身に自信がなく，インターネットを利用した間接的なコミュニケーションが好まれているといったステレオタイプ化された指摘が多く見受けられる。しかし，そこには急速に進む情報通信革命が生み出しつつある新しいメディア・コミュニケーションや人間関係に対する戸惑いが存在しているのではないだろうか。同時に，社会的権力によって統制できない人間関係，これまでの価値や規範に納まらない男女関係に対する偏見と，それを抑圧するような言説，興味本位に取り上げる言説が多数登場している。しかし，このような批判にもかかわらず，「ネット恋愛」は確実に成立し，広がりはじめているのである。

では次に，このようなインターネット上でのコミュニケーションの特徴をDennis Waskul と Mark Douglass の所論にしたがって整理してみたい。

4　On-Line Interaction と Cyberself

(1)　On-Line Interaction

Dennis Waskul と Mark Douglass【1997】は，オンラインチャットの相互作用を通じて，Cyberself が出現すると指摘している。それは，肉体から離れ，位置の欠如した，匿名で，多数―同時的コミュニケーションである。これらの要素のそれぞれがオンラインの相互作用の性質に新しい可能性を劇的に導入することになる。そして，それは参加者が自己の多様性を演じるコミュニケーションである一種の「セルフ・ゲーム」を意味している。

オンラインにあるとき我々は誰であるのか。コンピュータによって媒介され，肉体から離れ，そして位置の欠如した形式で表現されるとき，自分らしさ(self-hood)は何を意味することができるのか。人々が決して「実際に」会わず，話しもせずに誰かと恋に落ちると主張するのはどうしてだろうか。オンラインの文脈における社会あるいは文化の役割は何であるのか。

この種の疑問は多数存在し，それらは，コンピュータによって媒介された世界によって，自己と社会的世界の関係の境界線が移動しつつあることを示している。Dennis Waskul と Mark Douglass は，オンラインチャットの特質は，「位置の欠如」と「肉体の欠如」であり，オンラインチャットのコミュニケーションは，「時間」「空間」「物理的な場所」の意味に挑戦すると指摘する。そして，このオンラインチャットの相互作用は，Cyberself の流動的な多様性を許すものであり，その流動的な多様性は，いつ削除されてしまうかもしれない危険性も同時に有している。

(2)「位置の欠如(dislocation)」

コンピュータによって媒介されたコミュニケーションの技術は，伝統的に明確な社会的状況の境界線を犯し，「空間」の概念も破壊してしまう。

「位置の欠如」したコミュニケーションは，まず第一に，伝統的なスペースを区別するラベルを利用して状態を定義することをますます難しくする。例えば，オンラインチャットのようなサイバースペースで，従来の「公的」と「私的」な経験領域の区別を維持することは難しい。第二に，「位置の欠如」は，物理的な場所の区分も破壊する。例えば，学校や家庭は，物理的な場所であると同時に社会的状況でもある。コンピュータによって媒介された相互作用の形式の中では，このような社会的状況は，もはや必ずしも物理的な場所によって決定されることはない。

（3）「肉体の欠如(disembody)」

オンラインチャット環境のデジタル社会的な世界では，肉体は，社会的な相互作用のプロセスで純粋なシンボルに変換される。肉体と自己は，コミュニケーションのプロセスで出現する純粋な社会的に組み立てられた意味として存在する。そして，オンラインチャット環境で，自己と社会的世界は，位置が欠如し肉体も欠如したコミュニケーションのプロセスの中に完全な形で出現する。

テレビドラマ「With Love」のヒット以来，週刊誌などでは興味本位で「ネット不倫」を扱う記事が多数登場している。しかし，Dennis Waskul と Mark Douglass(1997)が指摘しているように，伝統的な定義によれば，「結婚していること」の政治的，法的な地位は，物理的な肉体に付与されており，今まで常にそうであった。「結婚していること」の地位は，特定の指につけられた結婚指輪という物理的なシンボルによってアイコン化され，しっかりと物理的な肉体に付与される。伝統的な基準で，“real” なものとして存在論的に特権がある地位を持っているのは肉体である。しかしながら，いったん肉体から離れた状況に移ると，参加者はこのような制約から解放され，位置も肉体も欠如した新しい相互作用の中で「ヴァーチャルな不倫」のようなケースも成立しうるのである。

「肉体の欠如」とは，単に物理的な身体が欠如していることだけでなく，従来の社会的地位や役割からも解放された関係の成立を意味している。それは，参加者に，テレビドラマ「With Love」の台詞にあった「どこの誰かということよりも，もっと大切なもの」が存在することに気付かせることになるのである。

（4） 個人をダイレクトに接続する移動電話

Dennis Waskul と Mark Douglass の以上のような指摘は，インターネットを利用したオンライン・コミュニケーションの特徴を的確にとらえている。そして，そこで指摘された「位置の欠如」と「肉体の欠如」は，移動電話についても当てはまるのではないかと考えられる。

「肉体の欠如」は，文字通信や電子メールの場合は当然であるが，加入電話でも成立していた。また，ある位置に固定された加入電話に対して，移動電話では，インターネットのオンライン・コミュニケーションと同様に「位置」という概念が薄れはじめている。移動電話の場合は，「どこかの場所」に電話をしているのではなく，移動している個人とダイレクトにつながる。従来，電話は場所に縛られたメディアであった。それは，職場や家族といった集団内の社会的な地位や役割と言い換えてもいい。しかし，移動電話は，個人電話であり，個人と個人をダイレクトにつないでしまう。オンラインチャットと同様に，位置と切り離されたところで社会的状況が成立する。さらに，音声通信の場合は，肉声が聞こえるために，Cyberself のリアリティはオンラインチャット以上に高まるのである。

オンライン・コミュニケーションを可能にするインターネット利用は，コンピュータだけでなく，今では移動電話によっても可能になり，その結果，新しいマーケットが成立しつつある。そこで，次にその現状について取り上げておきたい。

5　移動体通信：「ネオ・メーラー」マーケットの誕生

文字通信には，３つの流れがある。１つは，パソコン通信からインターネットにいたる電子メールの流れであり，２つ目は，ＦＡＸを利用した方法である。そして，３つ目は，ポケットベルから携帯電話やＰＨＳの文字通信にいたる流れである。

現在の携帯電話やＰＨＳでは，音声だけでなく文字通信も可能である。例えば，ＰＨＳの場合は，メーカーごとに「キャラメール」(NTT)「Ｐメール」(DDI)などの名称があり，異なる機種間でも，ポケットベルのようにメッセージの交換が簡単に行える。携帯電話にも，同じ機能がある。ポケットベル人気は終息に向かっているが，そこで生まれたメディア感覚やスタイルは消えることはな

く，携帯電話やＰＨＳに受け継がれているのである。さらに，最近では，インターネットの電子メールの送受信が可能な携帯電話やＰＨＳも登場している。今までインターネットの電子メールというと，高価なパソコンを購入し，個人的にプロバイダーと契約するか，大学で講習会を受けて，メールアドレスをもらう必要があった。ところが，今では携帯電話を購入すれば，自動的にメールアドレスがもらえ，その場ですぐに電子メールが始められるのである。このように，モバイルメディアとの融合によって，インターネット利用は研究室やオフィスからストリートへとその利用空間を拡大しつつある。

そうなると，大きなパソコンなど邪魔なだけになる。メール専用の小さな端末で十分である。97年12月に発売された「Pocket Boaed」(NTT ドコモ)は，電源を入れるとフジテレビの「ポンキッキーズ」の人気キャラクターである「コニーちゃん」が現れるという若い女性向けのシステム手帳サイズの PDA(携帯情報端末)であり，1,000字までのメールを簡単に交換することができる。この商品は，発売以来98年の３月までに２万台売れており，購入者の約70％は20～30代の女性で，購入者の60％はパソコンを持っていないという【『アクロス』[1998] p23】。マーケティング専門誌『アクロス』は，このような新しい利用者を「ネオメーラー」と呼び，その動向に注目している。

音声通信だけでなく文字通信，電子メールも可能になった移動電話は，一人一台の時代に向かって急速に普及しつつある。その結果，オンラインチャットや電子メールを利用して成立する親密性は，当然，移動電話を利用したコミュニケーションでも成立しはじめている。しかし，いつでも，どこでも，電話で話せる時代になるのかというと，どうもそうではないようだ。そこで次に，移動電話に求められている機能について取り上げたい。

6　移動電話の「コネクション機能」と「スクリーン機能」

電話は，相手の都合もお構いなしにかかってくる。電話をかける側にとって

は非常に便利である。しかし，かけられる側にとっては，所構わず鳴る移動電話やポケットベルは，むしろ「うっとうしいメディア」でもある。そこで，「着信者に優しい電話」にするために，移動電話でも「留守番電話機能」が活用されている。一人暮らしの青年の中には，家にいる時でも電話を「留守電状態」にしている者がいる。特に，女性の場合はいたずら電話対策でそうしている。要するに，彼らは，電話をかけてきた相手を確認してから受話器を取るかどうかを決めているのである。それは，好きな時にどこからでも電話がかけられて，しかも，相手からの電話も好きな時に受けられることを望んでいることになる。

このように考えてくると，今日のコンサマトリーなメディア・コミュニケーションのひとつの姿が見えてくる。それは，他者とのコミュニケーションを着信段階で操作しようとする姿である。その結果，移動電話では，いつでも，どこでも電話がかけられるという「コネクション機能」と不要な電話を拒否する「スクリーン機能」の二つが加入電話以上に必要とされることになるのである。

この二つの機能は，電話をボイスメール機器として利用するところから生まれる。そして，その特徴は，電子メールやＦＡＸと共通したものである。ただ，携帯電話やＰＨＳという移動体通信メディアの場合は，都市空間で利用されるケースが多い。インターネットを利用したオンライン・コミュニケーションがオフライン・コミュニケーションと衝突する機会は少ない。しかし，移動電話は，都市空間の真っ只中にオンライン・コミュニケーションを成立させてしまうのである。

そこで，都市空間における移動電話がどのような現象を引き起こしているかを次に考察しておこう。

7　ショートする２つのコミュニケーション

移動電話が普及するにつれ社会の拒否反応は予想以上に強まった。その内容は，移動電話の呼び出し音と話し声，携帯電話が発する電磁波の医療機器や心

臓ペースメーカーへの影響，運転中の携帯電話利用による交通事故の3つに分けられる。ここでは，前者の2つについて取り上げたい。

（1）　都市空間に張り巡らされる「電磁バリア」

突然鳴り響く携帯電話やＰＨＳの呼び出し音や話し声から快適な環境を保護するため，電車内での使用を禁止するアナウンスが全国的に拡大しているのは周知の通りである。このような動きはさらに拡大し，コンサートホールやホテル，病院などでは，移動電話の電波を遮断する電磁バリアを張り巡らし通話をシャットアウトできる新型装置を導入し始めている。扱うメーカーは10社を超え，1997年9月以来，レストランやホテル，病院などに約6000台を販売したメーカーもあるという【「携帯の迷惑電話をシャットアウト　設置進む通話防止装置　病院など業煮やし」98.08.19 東京読売夕刊15頁】。

例えば，日光堂がプライベートな空間で迷惑な移動電話が鳴るのを防ぐ装置として発売している「圏外くん」(6,5000円)は，高さ107mm，幅100mm，奥行き85mmと小型で，微弱な電波を発信する装置である。球形に電波が発信されて半径約3m以内が移動電話の圏外になる。タイマー付きで一定時間のみ圏外にすることもでき，邪魔されたくない会議の間だけ稼働させたり，レストランなどで「圏外」コーナーを設けて，混雑している時間帯のみ稼働させることも可能であるという。また，他の精密機器やペースメーカーへの影響はない【「日光堂，迷惑な携帯電話防止―圏外エリア作る装置」98.02.26 日経産業7頁】。

電子機器開発のアレストが開発しマクロスジャパンが販売している「ファンネル30」(120万円)は，半径15m圏内の携帯電話やＰＨＳを使えなくする通話防止装置である。携帯電話と同じ周波数の電波を発信して一時的に発・着信をできなくする。携帯電話(800MHz／1.5GHz)・ＰＨＳ・ポケットベルの四つの周波数帯に対応し，電波ノイズを発生させて発・着信を妨害する。館内で使うワイヤレスマイクなどには影響しないため，コンサートホールや映画館などへの販売を目指している【「アレスト，迷惑携帯電話を妨害―ホール向けに販売」98.

10.13 日経新聞朝刊15頁】[1)]。

郵政省【1998a】も1998年4月7日,「発着信による迷惑防止のための電波利用の在り方に関する研究会」を開催し,劇場等の特定の空間における携帯電話等の発着信による迷惑防止のニーズに対応した秩序ある電波利用を推進するため,携帯電話等の発着信による迷惑防止のための電波利用の在り方に関する検討を行うと発表した。そして,同省は,同年6月,ガイドラインを設け,免許が必要な無線局としてコンサートホールや講演会場,映画館など公共性の高い施設に限って通話防止装置の使用を認める方針を示した。

(2) 電磁波シールドスーツ

合繊各社は,すでに,電磁波の遮断率が高い銀メッキのナイロン繊維をアメリカから輸入し,自社技術でパソコンやテレビが出す高周波の電磁波を90%以上通さない各種生地に織り込んでいる。旭化成工業は,すでに,電磁波を遮断するスーツやエプロン,オフィスの制服などに使うポリエステル裏地の販売を始めている。カネボウ繊維でも,心臓にペースメーカーを使用している人向けの衣料などの開発が進んでいる【「パソコンもう怖くない　私の上着は電磁波フリー　合繊各社,銀メッキ繊維で遮断」97.10.18 東京読売朝刊11頁】。また,電磁波遮断製品メーカーのフリージアも,心臓ペースメーカーの誤作動の原因に

---

1) その他にも次のようなものがある。同じアレストが開発し株式会社メディックが販売している「WaveWall」の場合も,携帯電話(800mhz/1.5ghz)・PHSの電波に対し,微弱な電波のバリアをはりめぐらし,送受信をシャットアウトする。有効遮断範囲は半径約3mで電源は100VのACアダプターを使用し,手軽に設置することができるという。また,アスクが取り扱っている広範囲型(HYPER 30)の「WaveWall」は,「WaveWall standard TYPE」の約100倍の能力を持ち,遮蔽範囲は半径約30mになり,ペースメーカー装置専用機器(Fary)の場合は,遮断範囲は半径約50cmで携帯電話(800MHz/1.5GHz)のみを遮蔽する。その他,携帯電話の販売会社,セルコムが発売している「セルフォン・ディテクター」の場合は,病院や公共施設,ホテルなど他人に迷惑を及ぼす場所での携帯電話の使用者に,赤色ランプの点滅と音声アナウンスで警告する装置である。壁などに設置し,携帯電話の発着信時の電波を感知し作動する【「ランプの点滅と音声で警告する『セルフォン・ディテクター』を発売　セルコム」98.07.18 西部読売朝刊8頁】。

なると指摘されている携帯電話などの電磁波をほぼ100%カットする下着ベストを開発し，社会福祉事業団体の財団法人日本フレンド協会を通じて販売している【「心臓ペースメーカー誤作動防止に電磁波遮断の下着　フリージアが販売へ」98.09.10 大阪読売朝刊11頁】。

このように，電磁波による医療機器やペースメーカーの誤作動を防ぐ機器は，次々に商品化されている[2)]。

（3）「携帯電話＝悪者論」の落とし穴

ただ，「電磁波シールドスーツ」と「電磁バリア」は，その方法も趣旨もまったく異なる。したがって，医療機器やペースメーカー利用者への配慮と，劇場やコンサートホールなどでの呼び出し音の問題は，区別すべきである。前述したように，前者に関しては，様々な技術が商品化されつつある。また，後者の問題に関しても，郵政省「発着信による迷惑防止のための電波利用の在り方に関する研究会」の報告の中で，「今後早急に検討すべき事項」として，「発着信による迷惑の防止については，携帯電話等通話機能抑止装置のようにすべての通信を阻害とするのではなく，将来的には基地局からの制御チャネルを利用する等により迷惑となる通信のみを遮断とし，緊急通信，着信音の鳴らない通信，データ通信は可能とするような技術開発を行うことが適当である。」【郵政省，1998b】と述べられているように，通信機器の技術により解消可能な部分が大きい。

2）その他にも次のようなものがある。アオキインターナショナルがトーア紡と組み開発したスーツ「FARAGO（ファラーゴ）」は，銀メッキを施したナイロン繊維とウール単糸を合わせた糸を織物にしており，スーツの胸ポケットに入れた携帯電話に電話がかかってきた際に電磁波の電界を80%前後カットする【「電磁波を防ぐスーツ，アオキインター，トーア紡と組む」97.10.07 日経流通9頁】。インテリア用品製造・販売のアイワンズは，心電図装置など医療用電子機器が誤作動する携帯電話などが発する電磁波を遮断するカーテンを開発，病院などへ販売している。カーテンメーカーの黒沢レースなど四社で共同開発した「シャヘイルド」も電磁波を吸収する銀メッキを施したナイロン繊維をポリエステルに織り込んだカーテンであり，病室の入り口に設置すれば電磁波の8割を遮断できる。また，透析装置，人工呼吸器などの電子機器を覆えば，ほぼ完全に電磁波を遮断できる「シャヘイルド・カバリング」も商品化されている【「アイワンズ，カーテン電磁波遮断――医療機器の誤作動防止」98.02.05 日本経済新聞地方面／広島】。

このように，移動電話の普及によって発生した社会問題である携帯電話の電磁波問題と呼び出し音などの騒音問題は区別して考える必要があり，それぞれが新しい技術によって解消されようとしているにもかかわらず，現実には，両者は区別されることなく「移動電話＝悪者論」が展開される。たとえば，下記のような新聞投書は後を絶たない。

> (前略)確かに，音の迷惑という点だけを考えれば，女子高生の会話の声の方が大きかったりするし，ヘッドホンから漏れる音の方が耳障りだったりする。しかし，携帯電話はうるさいから迷惑なだけではないのである。音のほかに，電磁波を発しているから迷惑なのだ。なぜなら，電磁波はペースメーカーを入れている人にとって，とても危険なものだからである。病院での携帯電話の使用が禁止されていることから分かるように，ペースメーカーなどの医療精密機器は，電磁波によって影響される恐れがあり，ペースメーカーの埋め込み部分から二十二センチ以上離して使用すること，とされている。携帯電話の電磁波で，発作を起こす可能性もあるわけである。電車内にはさまざまな人が乗りあわせている。ペースメーカーを使用している人が隣に座っているかもしれない。このような点からも，車内や人込みの中での携帯電話の使用は，慎むべきなのだと思う。
>
> 東京都　大学生　22歳
>
> 【「携帯電話の使用はやはり慎重に(声)」98.04.09 朝日新聞朝刊5頁】

このような「移動電話＝悪者論」には，大きな落とし穴が存在している。病院の待合室や電車内などだけ携帯電話の使用を禁止しても，問題は解決しない。それ以外の場所でも同様の危険性は存在しており，誰が携帯電話を所持しているかを判断することはできない。携帯電話を都市空間から完全に排除することは不可能なのである。

また，郵政省は，携帯電話等通話機能抑止装置設置の基本条件として，次の

２点を上げている。

（１）　携帯電話等通話機能抑止装置(以下，本項において「装置」という。)は，特定の空間における静謐の確保等公共の福祉の維持のために，携帯電話等の発着信の制限が必要と認められる場合に限り，利用できること。

（２）　装置を設置・運用できる施設は，その運用により不特定の人々の携帯電話等の利用をみだりに妨害することのないよう，施設の管理者が，当該施設に立ち入る者を特定でき，かつ，利用者の許諾の確認が容易な施設に限定すること。【郵政省，1998b】

そして，駅舎，道路，公園等の不特定の人々が自由に出入り可能な施設，空間においては設置・運用を禁じている。したがって，利用者のマナーに訴えたり，通話防止装置のような電磁バリアを張り巡らす方法は，ペースメーカー利用者の不安を完全に解消することにはつながらない。いま必要なのは，電磁波シールドがペースメーカー利用者に安価で提供されることである。それにも，かかわらず前記のような投書が後を絶たないのは，別の理由があるからである。

それは，携帯電話やＰＨＳによって成立する関係性に対して社会的な拒否反応にある。携帯電話やＰＨＳ，ポケットベルなどが登場して以来，対面的コミュニケーション支持派とメディア・コミュニケーション支持派との間で熾烈な主導権争いが続いているのである。

実は，現代の若者たちも，メディアをバリアとして利用している。ヘッドホンステレオをした若者たちの場合を考えてみるとよく分かる。彼らは，周りの会話や騒音を好みの音楽で遮断し，都市空間を自分だけの快適な世界に変換している。携帯電話やＰＨＳも同じである。街角で携帯電話やＰＨＳを利用しているとき，私たちは，周りとの関係を遮断した二人だけの世界に没入することができる。しかし，対面的コミュニケーション支持派には，それが気にくわない。それなら，こちらも電磁バリアを張り巡らし，彼らの侵入を防げばいい。目には目を，歯には歯をである。

しかし，今回設置が認められた劇場やコンサートホールにしても，観客の中には医師や看護婦，警察官や新聞記者のように，緊急の呼び出しに応じなければならない人たちもいる。したがって，強制的に通信不能にするには問題がある。しかも，電磁波ではなく，呼び出し音や話し声が問題であるにすぎず，通信不能にまでする必要はない。実際，通話が禁止されている航空機内から，ハイジャックを知らせる通報がなされ，事件の早期解決につながった例もある。近年の「移動電話＝悪者論」は，現代人を新たな危険にさらす可能性があることを認識する必要がある。

さらに，危惧される点は，このような風潮に後押しされ，禁止されている空間に無届けで「電磁バリア」が設置されることである。今後は，このような不正設置の摘発が行われるようになると思われる。しかし，電磁バリアが見えない以上，人々は，自分が「電磁バリア」内にいることに気がつかない。しかも，一定時間だけバリアが張られる空間の場合は，「電磁バリア」の存在を認識することはますます困難になる。

こうして，二つのバリアが，いまショートしようとしているのである。そこで次に，ここで衝突している二つのコミュニケーションの中身について検討しながら移動電話に対する批判の社会的背景を考察することにしたい。

8　移動電話批判の社会的背景

ここまでの議論を整理すると，移動電話を公共空間から排除しようとする社会的背景は３つにまとめられる。第一は，新しいメディア文化，ポピュラー・カルチャーに対する拒否反応である。従来，電話は場所に縛られたメディアであった。それは，職場や家族といった集団内の社会的な地位や役割と言い換えてもいい。移動電話に対する拒否反応には，従来の社会的な統合からはみ出す新しい社会関係やメディア文化，ポピュラー・カルチャーに対する戸惑いと排除の論理が働いている。

第二は，移動電話に代表される移動体通信が，差異化を繰り返す未完の運動体だからである。従来のネットワークの「間接はずし」をしてしまうように映るからであり，ジル・ドゥーズとフェリックス・ガタリの言う「リゾーム」を作り出すように感じるからである。ネットワークは，社会の効率性を高め，ハイアラーキーな構造ではなく，水平的な役割の連結によって成立する。しかし，移動体通信は，ネットワークには解消されず，管理機構を無効化し，変幻自在の未完の多次元多様態を出現させるように思われるからである。

第三は，移動電話に代表される移動体通信が，電子メールやチャットなどのヴァーチャルな世界と対面的な日常世界の両者にまたがったところに位置する点にある。移動電話は，日常生活の真っ只中に通信回線の中のヴァーチャルな世界を持ち込んでしまう。ネット上でのチャットに似た状態が都市空間内に溢れ出てしまうのである。このように，移動電話に代表される移動体通信は，都市空間に新しい「親密と疎遠」を出現させてしまい，移動電話批判を引き起こしているのである。

移動電話批判の社会的背景は以上のように整理することができるが，重要な点は，移動電話の普及によって，都市空間内に溢れ出した Cyberself が社会的な拒否反応によってどのような事態に陥ろうとしているのかという点である。そこで次に，この問題を Max Kilger の所論にしたがって考察したい。

9　The Digital Individual

(1)　Virtual Self

Max Kilger【1994】によれば，デジタル技術の出現は，個人が状況をいかに定義するか，ミードの言う Me をいかに組み立てるかに影響するだけでなく，新しいタイプの社会的な実体である Virtual Self を発生させる可能性がある。

ここで言う Virtual Self とは，多重的デジタル情報源の合成物として形成された個人のイメージである。これらの情報源は，医学上，教育上，クレジット

上，犯罪上，軍事上などのデータベース，電子メールやリレー・チャットを含むが，それに限定されるものではない。したがって，Dennis Waskul と Mark Douglass の Cyberself がオンラインチャットのようなサイバースペースに限定された概念であったのに比べて，より広い概念であると言える。

Max Kilger は，Virtual Self が個人を表す社会的に認識された実体であることに注意することは重要であると述べる。ミード【1934】が，それらが人間であるか否かに関係なく，社会的に重要なシンボルを交換する実体は，社会的な実体として考えることができると認めたように，対面的な相互作用と同じように，この Virtual Self から集められた情報を人々は収集し解釈するようになる。これらの人々はこの Virtual Self に基づき，個人の動機，能力，保全，意図，および振舞いに関する結論を描くことになる。

Virtual Self は，社会的な実体として扱われ，それが代理をする個人のための「別名」として機能する。Virtual Self がプレーする舞台は，デジタル情報の操作を考慮するあらゆる装置か媒体であると Max Kilger は述べている。

(2) Digital Individual と Digital Homeless

特定の個人の代理をする幾つかの Virtual Self の情報内容は，非常に異なるか，または相いれないものかもしれないが，特定の個人の Virtual Self のセット(the set of virtual selves)は，Digital Individual【Kilger，1993】を形成することになる。つまり，Digital Individual とは，オリジナルの個人の多次元の表現であり，社会的な実体として扱われる Virtual Self で構成されているのである。

日常生活のあらゆる場面がデジタル技術で連結されるようになると，新たな問題が生まれる。例えば，クレジットカードしか利用できない商店が登場すると，現金しか持っていない人は利用できない。そうなると，デジタル技術が利用できない人は，デジタル社会から孤立することになる。Max Kilger は，このような現象を Digital Homeless と呼び，今後新たな社会問題になる可能性が

あると指摘する。

ここで重要なことは，これまでコンピュータ上での問題として議論されてきたVirtualという概念が，日常生活場面に移行してきた点にある。そして，この問題は，本稿で取り上げているメディア・コミュニケーションについても発生している。Digital Homeless現象は，通信手段の制限によっても発生しているのである。移動電話の電波が届かない場所は，まさにDigital Homeless状態を作り出す。また，移動電話を所持しなくなった青年が，友人関係のネットワークから外されていく現象も同様である。メディアに依存した人間関係を維持している人々は，メディア利用を制限されたとき，Digital Homeless状況になり，Virtual Selfによって構成されるDigital Individualが危機に陥っていることを実感するのである。

10　おわりに：リアリティ・クラッカー

オンライン・コミュニケーションが，対面的な社会の「時間」「空間」「物理的な場所」の意味の再考をせまり，Cyberselfの登場により社会と自己との境界線が移動しつつあるというDennis WaskulとMark Douglassの指摘は，都市空間における移動電話利用にも当てはまる。Dennis WaskulとMark Douglass【1997】は，チャット参加者は「リアリティ・ハッカー(reality hackers)」【Stone，1995】であると指摘しているが，移動電話の利用者はまさに「リアリティ・ハッカー」である。いつでもどこからでも電話ができる移動電話は，より親密な人間関係を促す。しかし，その親密さは，同時に新しい疎遠を生み出している。その一因は，移動電話利用者が他の人々のリアリティをハッキングするからである。ネットワークを利用して他人のコンピュータに進入し，データを破壊したり盗み出す人々をクラッカーと呼ぶが，周りの人には，携帯電話利用者はまさに「リアリティ・クラッカー」と映る。公共空間での移動電話の使用禁止は，社会生活を送る上でのマナーではなく，対面的コミュニケーションの世

界からオンラインチャットを排除し，「リアリティ・クラッカー」を締め出す戦略であり，「電磁バリア」(携帯電話等通話機能抑止装置)は対面的な世界を守るセキュリティ・システムなのである。しかし，デジタル情報社会にあって，それはMax Kilger(1994)の言うDigital Homeless現象を出現させることになる。

携帯電話やＰＨＳなどの移動体通信が，21世紀の情報通信社会を担うことは間違いない。移動電話の普及により，私たちは一定の場所にとどまっている必要がなくなった。それは，家族の個人化も促すはずだ。「携帯電話の中に家族がいる」そんな時代が到来するかもしれない。同時に，友人関係も変容するだろう。個人と個人をダイレクトにつなぐ移動体通信が生み出す個と個を取り結ぶリゾミックな社会は，家族の形態や友人関係を変容させ，社会全体の変容を引き起こすことになるであろう。

移動電話は，国境や地域文化を越えて普及している。その普及の早さ，秘められた可能性と社会に与える影響力の大きさを考慮しながら，この手のひらほどの小さなメディアが，どのような新しい社会的統合を生み出すのかを検討することが残された課題である。

参考・引用文献

Dennis Waskul and Mark Douglass, 1997, *Cyberself : The Emergence of Self in On-Line Chat*. The Information Society, Vol. 13, Number 4.

Max Kilger, 1994, *The Digital Individual*, The Information Society, Vol. 10, Number 2.

Max Kilger, 1993, *The Digital Individual*. Paper presented at the Third Annual Conference on Computers, Freedom and Privacy, San Francisco, CA.

Mead, G. H., 1934, *Mind, Self and Society*, Charles Morris, ed. Chicago, IL : University of Chicago Press. 『精神・自我・社会』(河村望訳)人間の科学社，1995。

M. Lynne Marsus and Tora K. Vikson and Maha El-Shnnawy and Louise L.

Soe, 1992, *Fragments of Your Communication : Email, Vmail, and Fax*, The InformationSociety, Vol. 8, Number 4.

Stone, A. 1995. *The war of desire and technology at the close of the mechanical age*. Cambridge, MA : MIT Press.

藤本憲一，1997，『ポケベル少女革命』エトレ。

松田美佐，1996，「移動電話利用のケース・スタディ」東京大学社会情報研究所調査紀要7号。

岡田朋之，1991，「匿名的双方向メディアとしての伝言ダイヤル」情報通信学会誌 32号。

岡田朋之，1993，「テレコム文化の現在形」井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』世界思想社。

富田英典，1994，『声のオデッセイ』恒星社厚生閣。

富田英典，1997，「メディア・コミュニケーションの変容―Intimate Strangerの時代―」佛教大学社会学部論集 第30号。

富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦，1997，『ポケベル・ケータイ主義』ジャストシステム。

吉見俊哉・若林幹夫・水越伸，1991，『メディアとしての電話』弘文堂。

野村総合研究所，1998，『情報通信利用者動向の調査』12月14日(http://www.nri.co.jp/nri/news/981214.html)

『アクロス』パルコ出版，1998，6月号。

郵政省，1998a，報道発表(4月7日)「特定な場所での携帯電話等の発着信による迷惑防止のニーズに対応した秩序ある電波利用に向けて」(http://www.mpt.go.jp/pressrelease/japanese/denki/980407j601.html)

郵政省，1998b，報道発表(6月10日)「特定の空間での携帯電話等の発着信の迷惑防止へ(概要)」(http://www.mpt.go.jp/pressrelease/japanese/denki/980610j601.html)

郵政省，1998c，『報道白書』(平成9年版)